

## 日曜地質巡検会記事

第10回 昭和38年1月20日

長崎市東長崎町矢上～柿道～毛屋(2万5千分の1長崎東北部)

9時半矢上に集合。海岸ぞいの小路を柿道へ向う。柿道の部落を通り抜け、北へ伸びる小谷の中の道に入る。ほどなく、よく成層した暗褐色の泥岩の好露出を見る。これは蛸道層の模式地とされているもので、各々計測やスケッチや写真撮影を始める。これより北へ進むと、この泥岩層は姿を消し、三叉路の少し南まで、頁岩を夾む粒子のよくそろった細粒砂岩が続く。三叉路近くで暗灰色頁岩が現われる。このルートでは地層は北にゆるく傾いていて、この暗灰色頁岩は柿道部落の泥岩層と同層準(蛸道層)と見做されているので両者の間に断層が存在するものと推定されている。

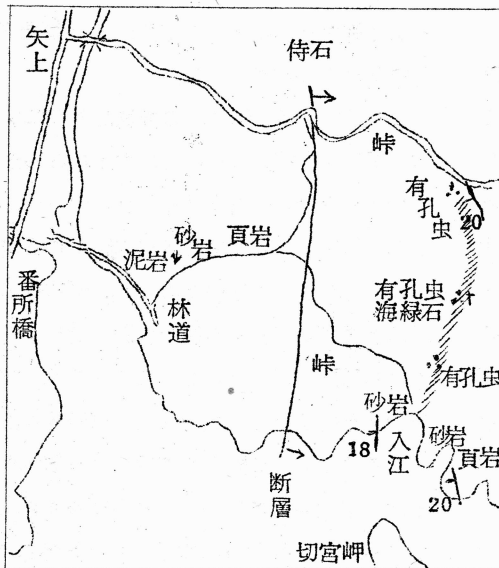
三叉路から東へ向うゆるい坂道を上る。この附近は南北性の断層が通る所で、地層は著しく乱れ、角礫化した部分や、数条の粘土を伴う迂り面が観察される。これから、峠附近で切宮層とされる粗粒砂岩を見、入江となった海岸へ下る。牧島対岸の海岸で見事に成層する毛屋層の砂・頁岩互層が見られる。ここより西に海岸ぞいに進む。切宮層の暗褐色細粒砂岩は連続して露出し、おおむね走向は南北で、西に20°前後傾く。牧島の対岸近くでサンドパイプを含む部分の上位の泥岩から、*Venericardia*, *Pitar*, *Cardium* 等の二枚貝化石が数個採集された。小雨をさけて雑木林の中で昼食をとった後、炊火を囲んで懇談する。それから、再び東へ引返すと

切宮層は入江の西岸で切れ、東岸には毛屋層の砂頁岩互層がみられる。さらに少し東へ進み、小岬をまわった所で炭質頁岩の薄層が数枚夾まれるのを観察する。

ところで、第1回巡検の折見たように、切宮、毛屋両層間には侍石層が夾まれるのだがこのルートでは侍石層は見られなかった。しかし、切宮、毛屋両層の露出状態より推定すると、侍石層は入江の奥に当る。侍石層の泥岩は軟質で、切宮、毛屋の砂岩に比し、侵食に対し抵抗力が弱かったものであろう。侍石層の分布を調べるにあたって、露頭線を推定してみると、この附近の毛屋、切宮層は共に走向が南北性であるので、両者に夾まれる侍石層は入江より北方に伸びるものと思われる。毛屋・切宮両層が砂岩であるのに対して、侍石層は明るい褐色の泥岩で、有孔虫を多産すること、基底部に海緑石を含むことなどの特徴を持つ。更に、層厚がうすく「かぎ層」として侍石層を追うことで、地質図作製法の研究会という今日の巡検会の目的を大かた達成できよう。こんな事で、入江から北にルートを取り、侍石層の露頭探しが始まった。丘の中腹の畑のあぜで、侍石層独得の明るい褐色のシルト岩を見出し、有孔虫を多く含んでいることを確認する。この少し北で、畑の横の崖で海緑石を多く含む明るい褐色のシルト岩を見出す。それから雑木林をぬけ、矢上→戸石間のバス道路の崖でも有孔虫を含む侍石層を見ることができた。これらをつなぐと、推定したようにはほぼ南北に伸び、その南端は先にみえてきた入江に達する。矢上に向っての帰

り道で、侍石のバス停留所の側の崖で、再度侍石層の露頭（模式地）をみる。これは南北性の断層のため侍石層が再度露出したものである。

参加者 16名（正会員，一般13，学生3）

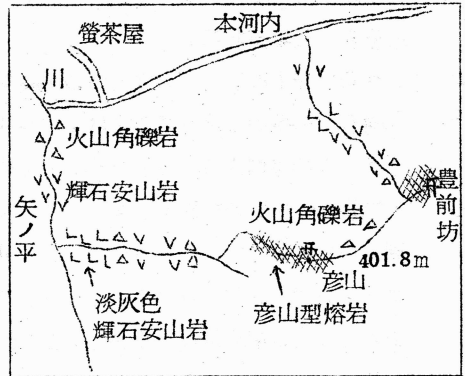


第11回 昭和38年2月17日

長崎市螢茶屋～矢ノ平～彦山頂～本河内  
（2万5千分の1長崎東南部）

今日は火山岩地帯での地質調査法の研究を目的として、9時半に螢茶屋に集合した。矢ノ平の小川にそって高度60mの橋までのぼり、これより彦山西山腹の沢に入る。この沢の中を220m附近まで上り、この北側の尾根に上る。このルートでは高度80mから160m附近まで分布する淡灰色で2～3mmの斜長石を多く含む輝石安山岩を夾んで、その上下には暗灰色のやや密な安山岩と火山角礫岩の互層が続いている。270m附近の灰色の輝石安山岩にはほぼ垂直に板状節理が発達している。ここで一休みしてから頂上を目指す。露頭は見られないが、ここ以下では見ら

れなかった斑晶を含み淡灰色の一見玄武岩のような転石が見られる。転石はこの種だけであり、斜面の勾配もこれ以下の部分に比し急になったので、岩質が変わったものと推定する。



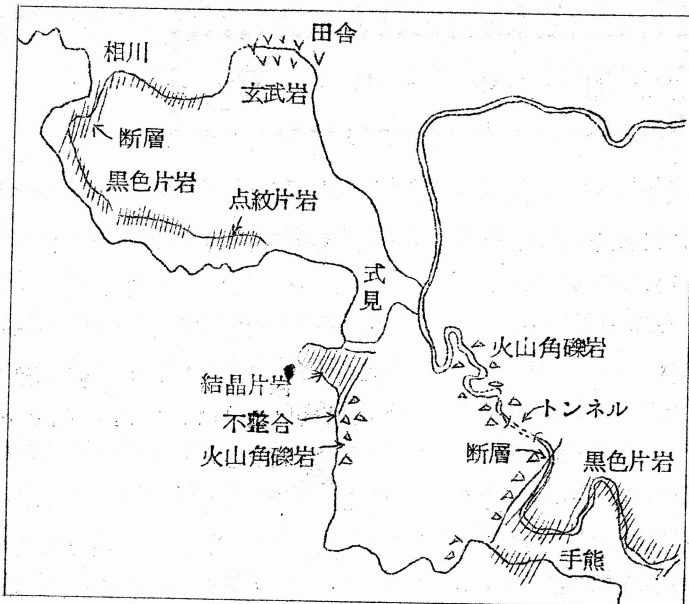
頂上で、眼下に長崎市街を見下しながら昼食をとる。午後は豊前坊神社近くに爆裂火口らしいものがあるとの事で調査することになる。火口らしい凹地は二つある。この附近の岩質は彦山頂のものと同質である。凹地は周囲より、ほぼ垂直に近く数米近く凹んでいる。底まで降りて調査にかかる。岩はだは新鮮で生成後あまり年代をへていないようだ。そのうちにハツバをかけた際ののみの跡が見付かり、昔の石切場の跡だろうということになった。下りは午前中見て来た熔岩と火山角礫岩が互層するのを確認しながら本河内へ降りた。

参加者 11名（正会員）

第12回 昭和38年5月27日

長崎市手熊～式見～相川～田舎（2万5千分の1長崎西北部）

4月の例会は雨で中止となり、今月に持越された。大波止9時発式見行長崎バスを手熊で降り、バス道路ぞいに式見へ向う。今日は会員相互で討論しながら進もうということで



角閃石を含んでいる。式見へ向って下る道路ぞいに火山角礫岩の露出が続く。礫径は不ぞろいで、最大1mを超えるものもあるが、いずれも角閃石安山岩礫である。

式見の町に入り左折して海岸に出る。大きな海食崖の下部に結晶片岩が、上部に火山角礫岩が露出している。露頭に近づいてみると南に約30°傾く結晶片岩は片理面にそって侵食削割され、この上に火山角礫岩が堆積したと考え

歩くうちに自然にグループができる。手熊のバス停留所から峠のトンネルの少し手前までは黑色片岩が続く。片理面は南東に35°~50°傾き、時にうすいレンズ状の石英脈が片理面にそって夾まれる。この手熊の結晶片岩は西彼半島に広く分布する結晶片岩の南限に当りこれより南では長崎火山岩類におおわれ、地表に露出しない。手熊西方の大きなカーブを曲ると眼下の海岸にも結晶片岩が露出している。小谷の向うの海崖に火山角礫岩がみられ、また谷の向うの山腹にも所々火山角礫岩が露出する。結晶片岩と火山角礫岩の接触面はかなりの急傾斜になりそうである。意見が不整合とするもの、断層とするものと二つに分れた。慎重に露頭を探しながら進むと、トンネル東側のカーブで粘土を夾んで両者が接することが確かめられた。又地形的になだらかな丘陵を作る結晶片岩上をおおう火山角礫岩の部分で勾配が変わるのが見られる。それ故一部は断層関係であることが推定される。トンネル口附近は淡黄褐色の凝灰岩~凝灰角礫岩で

られる。片理面はこの両者間の不整合面と一致している。この不整合を見ることが今日の主目的の一つであり、各自スケッチや写真撮影やサンプリングと忙しい。

式見の波止場近くの神社で昼食をとってから、恒例の自己紹介がすむと、来月の総会開催の打合せを行なう。午後からは海岸ぞいの道路を相川へ向う。式見の町を出てまもなく5km前後の曹長石を含む点紋片岩が見られる。それからは相川まで黑色片岩が連続して露出する。相川の少し手前で30~60cmの粘土を伴う断層(送り面走向N26°W、西に70°傾斜)が見られた。相川から東南東へ小道を上り田舎へ向う。田舎近くの標高70m附近から畑土が赤味を加えて来る。そして、それ以下では水田がみられるが、それ以上では畑となり、畑の石垣は黑色の玄武岩である。ここで玄武岩の転石から標本を採集して式見に引返し、午後4時前に解散した。

参加者27名(正会員、一般17,学生10)

(堀口承明記)